

## シリコンバレーとルート 128 における 地域産業システムのその後の展開\*

経営学輪講 Saxenian (1994)

Saxenian, A. (1994). *Regional advantage: Culture and competition in Silicon Valley and Route 128*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

浜松 翔平<sup>†</sup>

### はじめに

1970年代にシリコンバレー、ルート 128 は共に繁栄していたが、1980年代に入ると国際競争の激化によって共に一時衰退してしまう。だが、この後の道筋が両者はまったく異なる。1980年代半ばには、産業構造の変化に適応したシリコンバレーが発展を遂げる一方で、大企業が支配的であったルート 128 は衰退してしまった。国際競争の激化に伴うその後の展開への両地域の本質的違いとは何だったのか。Saxenian が、160人以上にインタビューを重ねて、この疑問に答えたのが本書 *Regional Advantage* である。

本稿では、Saxenian (1994) を取り上げる。最初に地域を分析視点とする理由を述べる。次に、シリコンバレーとルート 128 を比較するための重要な地域的要因について説明を行い、シリコンバレーとルート 128 について歴史的背景を見る。

本書は、日本でも 1995 年に大前研一による訳書が出版され、研究者のみならず、多く

---

\* この経営学輪講は Saxenian (1994) の解説と評論を浜松が行ったものです。当該論文の忠実な要約ではありませんのでご注意ください。したがって、本稿を引用される場合には、「浜松 (2009) によれば、Saxenian (1994) は…」あるいは「Saxenian (1994) は (浜松, 2009)」のように明記されることを推奨いたします。

† 東京大学大学院経済学研究科 [ee086043@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp](mailto:ee086043@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp)

のビジネスマンに読まれた。本書が出版されてから 15 年が経過し、その間、IT バブルを経験し、さらにサブプライム問題を発端とする金融危機が現在深刻化している。シリコンバレーの強みといわれている、地域ネットワークがどれほど強固であったか検証することが必要であろう。そのための第一歩として、その後、シリコンバレーやルート 128 がどのような状況にあったか知ることが必要となる。ディスカッションでは、Saxenian (1994) で用いられたデータを用いて、*Regional Advantage* 後のシリコンバレーとルート 128 における、ハイテク関連企業の従業員数や事業所数の推移を概観する。

## 1. なぜ地域を分析視点とするのか

本書では、アメリカにおける二つの地域を対象に、一方の地域が繁栄の道をたどり、他方は衰退してしまう現象を、地域という視点から説明している。冒頭で、なぜ彼女が地域という視点を取り上げたのかについて触れておきたい。

まずカリフォルニアのシリコンバレーとボストンのルート 128 の歴史について簡単に述べる。1970 年代、カリフォルニア（シリコンバレー）とボストン（ルート 128 沿線）は、エレクトロニクス革命によって世界のトップを走る地域として国際的な注目を集めていた。どちらの地域でも、旺盛な企業家精神をもった人材が活発な技術開発を行い、桁外れの成長率を見せた。Saxenian が注目する以前からも、大学の研究からのスピノフと軍事支出による繁栄という共通点から、この地域はよく比較されたのである。世界の政策担当者や計画立案者が、産業活性化のモデルとしてこの地域を特に注目していた。

しかし、1980 年代に入ると、この注目もさめてしまった。シリコンバレーの主役だったチップメーカーは、半導体メモリの市場を日本に明け渡し、ルート 128 のミニコンピュータメーカーは、ワークステーションやパーソナルコンピュータに顧客を奪われることになる。かつては、アメリカのハイテク産業は向かうところ敵なしといわれていたが、国際競争の激化と共に衰退の道をたどってしまったのである。

1980 年代後半になると、この二つの地域で経済的な差が出てくるのである。シリコンバレーでは、サンマイクロシステムズ等の、半導体やコンピュータ関連のベンチャー企業が相次いで誕生し、急成長する。そのほかにもヒューレット・パカード等の大企業も目覚ましい発展を遂げた。一方で、ルート 128 は回復を見るまでもなく、大企業は人員整理をし、新たに生まれたベンチャー企業も人材を吸収できるほどの雇用を生み出すこともなか

った。

定性的な説明のみならず、量的側面からも、シリコンバレーの回復とルート 128 の衰退を見て取れる。

第一に、企業価値の点である。1986 年から、1990 年にかけて大手技術系企業の企業価値が、シリコンバレーでは 260 億ドルに増加したにもかかわらず、ルート 128 は 10 億ドルの増加にとどまっている。

第二に、労働者数である。その地域で働いている労働者は、1975 年にはほとんど変わらなかったが、1975 年から 1990 年の 15 年間でシリコンバレーでは約 15 万人分の技術関連雇用が生まれ、ルート 128 ではその 3 分の 1 しか生まれなかった。

第三に、エレクトロニクス製品の輸出総額である。シリコンバレーは、アメリカ全体のほぼ 3 分の 1 にあたる約 110 億ドルを輸出したが、ルート 128 は、46 億ドルに過ぎなかった。

第四に、急成長中のエレクトロニクス企業 100 社のうち、シリコンバレーは 39 社を占めているが、ルート 128 では、4 社である。これは、カリフォルニア南部やテキサスにも追い越されている。

1980 年代後半まで同じ歩みを見せていたシリコンバレーとルート 128 であるが、なぜ前者は発展し、後者は衰退するという経済的差異が生じたか。

経済学の用語である「外部経済」からの説明では不十分である。外部経済を生み出すのは、専門技能、ベンチャーキャピタル、専門業者・サービス、インフラストラクチャー、大学、非公式な情報の集合体である。シリコンバレーとルート 128 は、共に専門化した技能や情報を集積していた。集積によって、空間的に近いという利点のみからでは、両者が市場や技術の急激な変化に対応していけるかどうかという、企業の能力については説明できない。そもそも、シリコンバレーの企業は、内部外部の区別が非常につきにくい状況になっていたのだ。

Saxenian は、産業が上手く適応するためには、地域に特定化された（根ざした）固有の質的な要因が重要であり、このいわば「地域要因」こそが、両者の差を生んだと主張した。軍事支出をもとに発展したというスタート地点と技術は似通っていたが、シリコンバレーとルート 128 は、第二次世界大戦後根本的に異質の産業システムを築いていたのである。これは、1980 年代の半導体危機に際して、対照的な対応がなされたことで「産業システム」の違いがよりはっきりとわかるようになった。

質的な地域要因を見ることで、二つの地域でのハイテク産業の興亡の原因を見て取ることができるのである。以下では地域要因の詳細を見てみよう。

## 2. 地域産業システムという枠組み

Saxenian (1994) ではこの地域要因が地域産業システムという枠組みで説明されている。シリコンバレーでは、労働市場の開放性、非公式コミュニケーションを通じた学習、社外供給者や顧客とのコミュニケーションを核とした、地域ネットワークが形成された。企業と企業の繋がりのみではなく、業界団体、大学等の地域組織とも強く結びついたのである。

一方、ルート 128 は研究、設計、生産、販売などの垂直統合を進め、機密保持と企業への忠誠を強める少数の独立性の高い企業を中心とした、自己完結型独立企業の集合体であった。

独立企業をベースにした大企業の分析は技術や技能などの資源をほとんど社内でまかなうため、分析で地域経済の構造が取り上げられることはまずない。しかし、シリコンバレーのような地域ネットワークをもとに優位性が作られている企業を分析するうえで、地域経済のダイナミックスを取り入れなければ全体像がつかみにくい。

以上のように、「外部経済」に代表されるような、従来からの説明方法ではうまく説明できない事象がここにある。また本書で取られるアプローチの前提条件として、企業は外部から独立しているのではなく、社会的・制度的な枠組みの中に深く組み込まれており、この枠組みは企業の戦略と機構と互いに影響を合っているものである。この前提の上で、地域産業システムという分析の視座を設定する。地域産業システムを分析するために、以下の三つの視点が大事になる。

地域の組織や文化

産業の構造

企業の内部構造

それぞれについて説明しよう。まず地域の組織や文化について。地域の組織とは大学や行政などの官民の組織、趣味のサークルや団体などの非公式グループ等の、地域でコミュニケーションを作り出し維持する集団のことである。これらの組織は地域の団結を生み、労働市場の動きやリスクに対する態度などの共通認識を醸成し、結果として地域文化を形

成することになる。地域文化と地域の組織が相互作用を起こしながら絶えず変化を起こしていくのである。

産業の構造について。産業構造とは、社会的な分業の度合いを表している。顧客とサプライヤー、競合他社との関係性を決めているものだ。地域開発の研究者はこちらを重視して考えているが、企業の内部構造は、組織内で縦と横の調整、権力の集中や分散、責任の分配、仕事の専門化等を分析するものである。

これら三つの視点によって、それらの背景となる地域の歴史に焦点をあて、第二次世界大戦後の各地域経済が歩んできた道筋の違いを概観しよう。

### 3. シリコンバレーの地域産業システム: 地域ネットワーク

シリコンバレーの集団としてアイデンティティの源流は、1960年代のフェアチャイルド・セミコンダクタ社にある。本書には1960年代のシリコンバレーの多くの技術者は、「フェアチャイルドからは起業家や経営者が輩出されており、最高の経営修行の場であった」と語っていたことが記述されている。また、同じ職場で働いていたものが転職して、競争相手になったとしても、フェアチルドレン（フェアチャイルド出身者）コミュニティとしての一体感を高める役割を果たしていた。

フェアチャイルドという同一企業への帰属意識を発端に、シリコンバレーという地域に非公式な付き合いから情報を共有しあい、協力する習慣がもたらされた。

非公式な付き合いは、職業ネットワークにも役立った。シリコンバレーでは、1970年代、技術者の年間離職率は35%、小企業で59%と非常に高かった。次から次へと転職したので、同僚が顧客、競争相手、上司が部下へとなることは日常茶飯事のことであった。そのため、企業に対する忠誠心というよりは、仲間に対する忠誠や技術進歩という大義に対して忠誠が働いた。地域の社会ネットワークや職業ネットワークが一種の組織を超える組織として働き、ネットワークを通じて技術者たちが協力の相手をさまざまに変えながら技術発展をした。

具体的に協力について述べると、1970年代には、シリコンバレーでは半導体製造装置、材料産業の技術者が企業をやめて、ベンチャーキャピタルやエンジェルとして資本財を提供したり、資材を生産する会社を始めた。個々の企業で半導体装置全体の製造を担う必要はなく、専門資材も他地域では手に入らなかったため、地域内で企業が相互依存しあう構

造になる。

1980年代には、シリコンバレーにおけるディスクドライブ産業で、製造装置や材料を供給する企業とともに、何百もの小さな設計会社、下請けメーカー、金属加工工場、ソフトウェア開発業者、プロトタイプ作成会社などの専門サービスを提供する会社が誕生した。さらに、弁護士やコンサルティングなどのプロフェッショナル業務を担当する事業も発展する。法律事務所は、知的財産の管理を担当するという役割のみではなく、ベンチャーキャピタルと起業家を結びつける役割も果たしていた。起業家から相談を受けた法律家が知り合いのベンチャーキャピタルを紹介していたのである。さらに、スタンフォード大学等の教育機関も特別プログラムを実施して修士、博士を多く輩出したり、企業内で人材育成できない小企業に対して教育機会を提供したり、さらにはこうした活動により横のつながりをひろげたりする役割も負っていたのである。このような環境下で、企業は専門分野に力を注ぐだけでよかった。

このように互いに支えあう社会的構造や組織、そして協力しあう習慣のおかげで、相互学習と調整の枠組みが作られた。本書では、半導体企業の役員からベンチャーキャピタリストに転進した人の話で、実験用の石英管が壊れたり薬品が切れたりしたときは、近くの競合企業に電話をして助けてもらったという例が挙げられている。その上このような非公式なつながりのみではなく、ビジネス上のつながりもあった。例えば、クロスライセンス契約、二次供給契約、技術交換契約、合弁事業等である。また、さらにイミテーションやリバースエンジニアリング<sup>1</sup>も広い意味で協力と捉えることができよう。

しかし、シリコンバレーは、協力のみで発展したのではない。協力と同時に熾烈な競争が繰り広げられたのである。企業は、協力とともに技術の優秀さやイノベーションでステータスが決定されていた。技術開発にしのぎを削り、技術者は寝る間も惜しんで研究に没頭することがもともとめられていたのである。

企業の内部構造という点では、シリコンバレーの企業の典型となっているのがヒューレット・パッカートの方式である。個人に対する信用と自主性の尊重、気前の良い福利厚生制度を中心とする経営手法を他の多くの企業が真似ていた。作業手順や服装や働き方など形式にこだわらず、自社株購入制度等働いた分だけ報いる制度が普及していた。東海岸に比べると、形式にとらわれない、権限の分散した、オープンで平等な労働環境が作られたのである。ここでは、労働者の間に積極的に事業参加する姿勢と情熱がはぐくまれたのである。

<sup>1</sup> 分解して、製品の設計情報を知ること。

#### 4. ルート128の地域産業システム:独立企業ネットワーク

1950年代には、アメリカの最大手の半導体メーカーがボストンのルート128沿線地域で活躍していた。技術革新の長い伝統があり、他に類を見ない資本と技術と技能蓄積があった。企業は、独自企業をベースにした産業秩序を受け継ぎ次世代につないでいた。秘密主義と縄張り意識が個人と会社の関係を形作っていた。企業は昔ながらのピラミッド型組織が幅を利かせていたのである。

これらはルート128の企業の典型的な特徴である。源流は、この地域のアイデンティティにある。ニューイングランドの伝統から階級を重んじるピューリタンの倫理観が地域の文化を支配していた。家族や出身階級によって将来が決定され、社会生活を営むコミュニティの結束が強く、職業生活とは完全に分離しており、シリコンバレーのように生活全般にわたる地域や産業をベースにした強い忠誠心が生まれることはなかった。仕事が終わってからも、まっすぐ家に帰ることで、他企業との技術情報の交換等の非公式な交流も行われなかった。さらに、成功した起業家リーダーが社会的に目立つこともなく、コミュニティとして一体感を育てることもしなかったことが特徴として挙げられよう。また、同じ会社で長年勤務するプロフェッショナルを好む傾向が強く、転職も大企業から、大企業へが一般的であった。

このように、リスクを避ける姿勢がますます強まったため、周りに起業を企てるような人もおらず、起業家活動について学ぶチャンスはシリコンバレーに比べたらはるかに少なかった。大きな原因のひとつは、ベンチャーキャピタルであろうとSaxenianは述べている。1981年シリコンバレーでベンチャーキャピタリストが投資した案件は37社であったが、マサチューセッツでは17社しか投資はされていない。さらに、質的な違いとして、ルート128ではベンチャーキャピタルが金融資本家によって興され、銀行家によって運営された。一方シリコンバレーでは、起業家や成功した技術者からの転身であったために、年齢的にも若く活力に溢れ、事業が上手く立ち行かなくなると、自ら手助けすることができたのである。

大学の果たした役割も忘れてはならない。スタンフォード大学のように特別プログラムを実施して修士号、博士号を量産することはせず、MITは正規学生のみに注力していた。さらに、スタンフォード大学では、1967年にライセンス局ができて産学連携の足がかりになっていたのだが、MITには1980年代後半までライセンス局はなかった。

産業構造についていえば、企業は自給自足体制を進める中で形作られた。これは、シリコンバレーに遅れること 10 年ほど、軍事産業需要中心でこの地域が発展を遂げたことによる。さらには大量生産方式の大企業型モデルを発展させた。経験豊富な人材を活用したことで、50 代 60 代の役員クラスの人材を重宝し、旧来の方式をさらに進展させることになった。

企業の内部構造は、基本的にはピラミッド組織であり、形式重視の意思決定手順や経営手法、保守的な職場体制をとっていた。

ただ、ルート 128 の中心的企業である DEC は例外的にシリコンバレーに近いような反抗精神を持っていた。マトリックス組織構造をとり、従来 of 官僚主義的な管理に変えて、会社に対する強い忠誠心とボトムアップの意思決定、技術価値へのプライドを中心にすえた強烈な企業文化を育てた。シリコンバレーの企業と大きく異なるのは、一度 DEC から離れてしまった場合、村八分にされコミュニティから完全に決別させられるという閉じた世界を作っていたのである。

このように、ルート 128 では、比較的少数の独立大企業による、閉じた地域産業システムを発展させていったのである。

## 5. 地域ネットワーク型システム VS 独立企業型システム

以上のように、シリコンバレーとルート 128 は、その歴史の中で地域産業システムとしてまったく異質なシステムを作り上げた。

地域経済を生産要素の集合体としてではなく、シリコンバレーとルート 128 を二つの産業システム、すなわち「地域ネットワーク型システム」対「独立企業型システム」として見ることで、変化への適応力の違いがわかるのである。

地域ネットワークをベースにした産業システムのほうが、個々の企業内で閉じてしまっている産業システムより、産業構造の変化に対して柔軟性が高く、技術的にダイナミックなものとなっている。

シリコンバレーは、競争と協力関係が築かれていく中で、専門メーカーがともに学習をし、地域内で互いに相手のニーズに合わせる事ができた。

ルート 128 では、独立した自給的な組織になっていたため、技術的变化のプロセスが企業の境界から外に出なくなり、大きく変化する社会へのニーズに対する適応が難しい。



ネットワークを生み出した地域では、対話から相互信頼を生み出し、協力関係に発展する。地域内で多様な企業の存在により、技術や技能を組み替えて製品開発ができる。つまり、本書で何度も述べられているように、地域は依然として競争優位を生み出す重要な要因となっている。

しかし、空間的に企業が集中しているだけで、利益になるような相互依存関係が生み出されるわけではない。地域の歴史の中で制度や文化といった地域産業システムは生まれるために、地域によっては垂直統合と権力の集中化を維持したルート 128 のようなシステムが生まれる可能性もある。

技術革新は個々の企業で行うものであると同時に、集団で行うものである。企業と企業とを隔てる制度的・社会的な境界を打ち破るような変化によって、この構造は打破できる可能性がある」と述べられている。例として、Saxenian はルート 128 の企業であった DEC の機構改革を挙げた。数千人にもおよぶ技術者の人材流出は 1990 年代初めに登場したソフトウェアやネットワーキング、スーパーコンピュータの企業群の成長に力を貸すことができるため、システム変化を起こす大チャンスであると述べた。その後、1998 年に DEC 自体はコンパックに吸収合併されている。

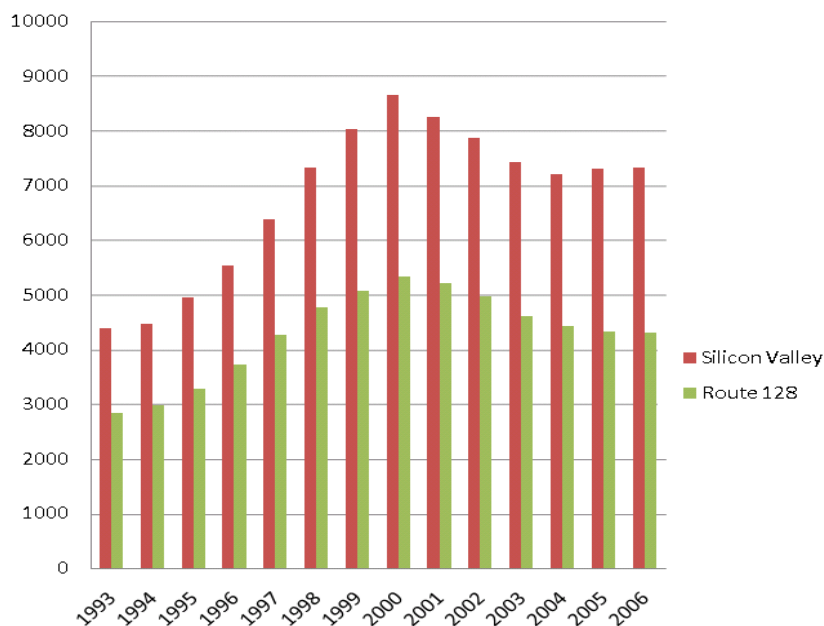
ただ、地域ネットワークをすでに生み出し、優位性を享受しているシリコンバレーであっても、油断してはならないというのが Saxenian の見解である。つねに新しい経済状況に対して、地域産業システムを作り直していかなければならない。一部の企業が他に依存することなく閉じた自給的な戦略をとる可能性や、技術基盤や産業基盤の悪化の危険性も常に抱えている。例えば、アップル社が、マッキントシュという互換性のないアーキテクチャを外部に開放せずに苦境に陥ったように、独自製品に賭けることで業界で孤立する危険性もはらんでいる。つまり、ネットワークを捨てて独自の製品を出すことで、企業間のネットワークを弱めてしまう危険性があるのだ。

さらに不況によって、製品やサービスの差別化や新市場の開拓よりも、コストを下げることで競争に立ち向かおうとしたり、訴訟という手段で交渉や技術革新の代わりに利益を得ようとする企業が増えることでこの地域の創造性を損なう可能性もある。また、教育・研究・訓練への公的資金の減少、ベンチャーキャピタルの活動を抑えるような徴税政策、交通渋滞や住宅価格の高騰はネットワークを損なう危険性を持っているのである。

## おわりに: ディスカッション

以上が、Saxenian (1994) の要約である。本書で述べられることは、当然のことながら本書が出版される 1994 年までのものである。その後も、地域ネットワークを維持し、シリコンバレーは競争力を維持し続けているのか。この問いにこたえるための第一歩としては、本書で用いられたデータからのシリコンバレーとルート 128 の分析が必要となるであろう。ここからはディスカッションとして Saxenian (1994) で用いていたデータから *Regional Advantage* が出版された 1994 年以降のシリコンバレーと、ルート 128 の状況を概観する。<sup>2</sup> データは、米国国勢調査局から発行されている、County Business Patterns の 1993 年から 2006 年までの事業所数と従業員数のデータである。1997 年以降、標準産業分類 (SIC) から北米産業分類システム (NAICS) に産業の分類の方法が変更されたため、

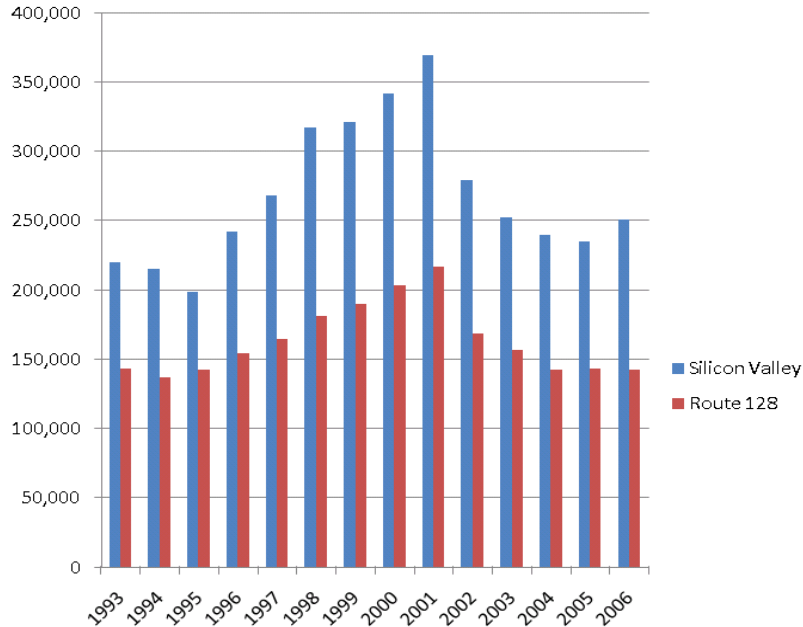
図 1 シリコンバレーとルート 128 における事業所数の推移



出所) U.S. Census Bureau (2008) から筆者作成

<sup>2</sup> ここでは、Saxenian (1994) で定義されているように、シリコンバレー地区を郡レベルで、Alameda、San Mateo、Santa Clara、Santa Cruz の 4 郡とする。また、ルート 128 は、Essex、Middlesex、Norfolk、Suffolk とする。

図2 シリコンバレーとルート 128 における従業員数の推移



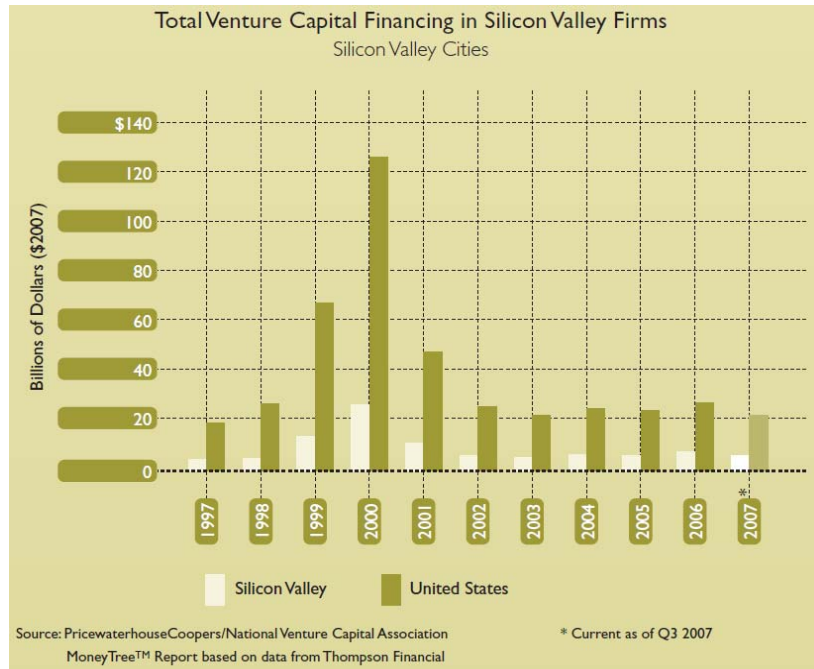
出所) U.S. Census Bureau (2008) から筆者作成

1998 年以降のデータは補正を加えて用いた。<sup>3</sup>

図 1 を見ると、シリコンバレーとルート 128 のハイテク関連事業所数は、1993 年から 2000 年をピークにともに上昇を続けた。シリコンバレーはルート 128 にくらべて、約 1.5 倍の事業所数を保ち、2006 年まで、共に同様な推移を示している。2000 年には、シリコンバレーでは約 8,600 の事業所があり、これは 1993 年に比べて約 2 倍である。以降 2003 年の 6,800 まで減少し、その後 2006 年まで横ばいとなる。従業員数の推移を示した図 2 から、シリコンバレーとルート 128 は同様な推移を見てとれる。1993 年から 2001 年をピークにシリコンバレー、ルート 128 ともに上昇を示している。2001 年のピークにはシ

<sup>3</sup> Saxenian は、SIC の分類で computer and office equipment、communications equipment、electronic components and accessories、instruments and related products、computer and data processing services に当たる企業群の分析を行っている。1998 年以降 SIC から NAICS に変更になったため、ここでは、上記の分類に対応する computer & electronic product、electrical equipment、appliance & component、machinery、information & data processing services (2002NAICS からの分類で、internet service provider、web search portals、and data processing services を対象とした)、computer system design & related services、software publishing の分析を行う。

図3 アメリカ全体とシリコンバレーにおけるベンチャーキャピタル投資額



出所) Joint Venture: Silicon Valley Network (2008)

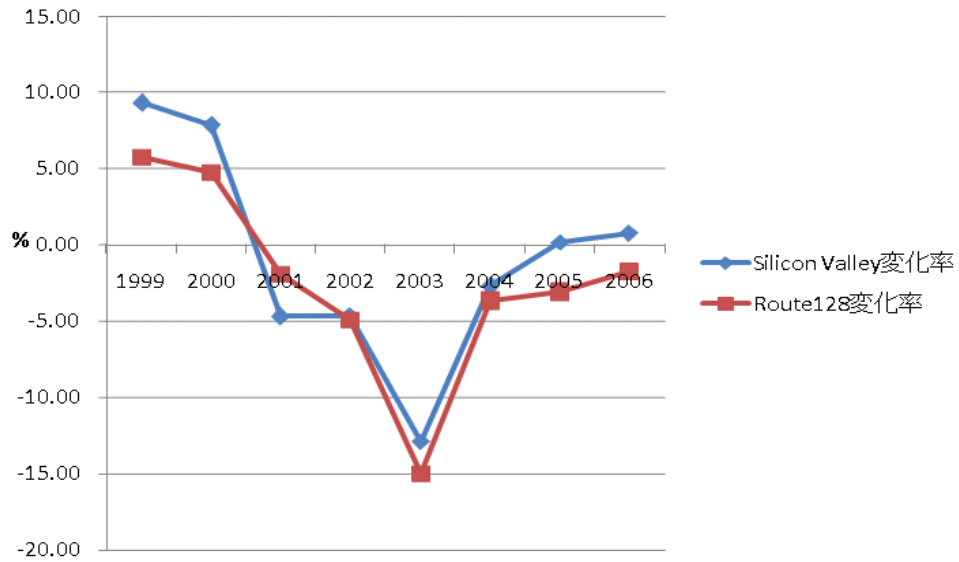
シリコンバレーには、ルート 128 の 1.7 倍にあたる 36 万人の雇用が生まれた。

この 2000 年前後の大幅な上昇とその後の減少は、IT バブルともいわれる 2000 年前後の IT 関連企業への過剰投資と平行な動きを見せている。シリコンバレーのベンチャーキャピタルの投資額を見ると、2000 年に大幅なピークを迎えその後ピーク前の水準に戻っている(図3)。

図1や図2のグラフの推移から、もし1993年時点でシリコンバレーとルート128が同じ事業所数を擁していたら、シリコンバレーとルート128は同じ推移を示したのではないかと推測できる。つまり、シリコンバレーが特別優位性をもっているのではなく、ルート128も同様に健闘している可能性があるのだ。

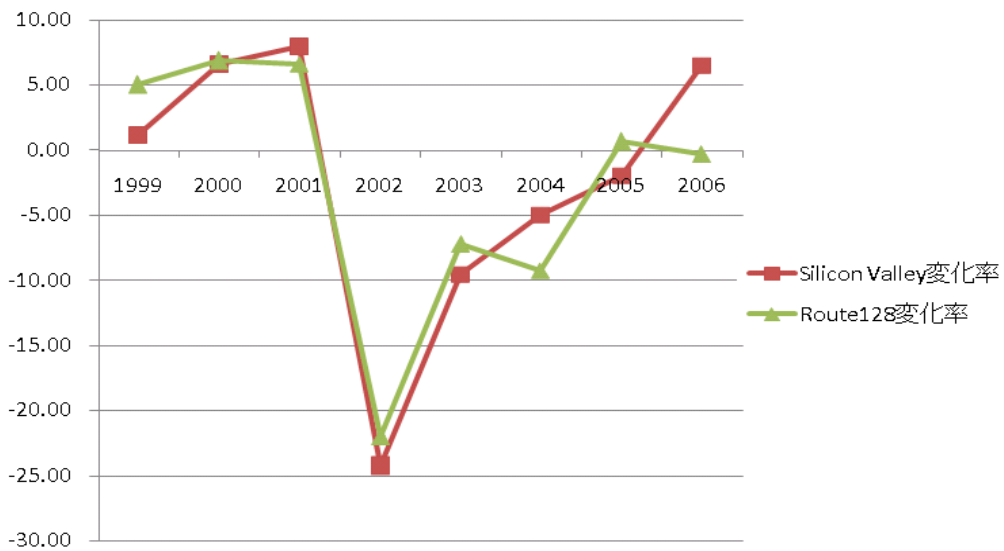
そこで、シリコンバレーとルート128の事業所数、従業員数が前年に比べてどれほど変化したかを見てみよう。図4と図5は、前年比の変化率を示している。図4の事業所数の変化率を見てみると、シリコンバレー、ルート128はどちらも同様な変化率を示しているといえよう。1992年から徐々に減少し、2003年にシリコンバレーはマイナス12.9%、ルート128はマイナス15%となりその後回復を見せている。また、図5の従業員数の変化率を見ても、2002年にシリコンバレーが24.3%のマイナス、ルート128が21.9%のマイ

図4 シリコンバレーとルート128における事業所数の前年比変化率



出所) U.S. Census Bureau (2008) から筆者作成

図5 シリコンバレーとルート128における従業員数の前年比変化率



出所) U.S. Census Bureau (2008) から筆者作成

ナスとなりその後徐々に回復という状況となっている。

このデータからは、シリコンバレーとルート 128 を比較して特別シリコンバレーが優位性を持っていることは読み取れない。IT バブル崩壊後の回復を見ると、事業所数の変化率では確かにシリコンバレーの方が若干勝っている。しかし、その差は、最大 3.3%に過ぎない。この差をもってシリコンバレーの優位性を語ることは難しいだろう。

Saxenian (1994) は *County Business Patterns* から得られた従業員数や事業所数のデータ以上に、企業価値や輸出総額、有名企業の数等のデータ、実際現場に出向きインタビューから得られた質的データから、シリコンバレーやルート 128 の地域要因をあぶりだしているため、このデータのみから批判することはできない。しかし、少なくとも Saxenian (1994) の用いた従業員数のデータを用いた場合、1993 年以降シリコンバレーのみが地域ネットワークによって驚異的な回復力を示すことは見てとることはできないといえる。

今回、ディスカッションで用いたデータは、1993 年から 2006 年の 14 年間のデータであり、長期的に見るとシリコンバレーの危機からの回復力が見て取れる可能性もある。現在問題となっているサブプライムを発端とする金融危機から、ベンチャーキャピタルの投資額に大きく影響することが考えられる。2000 年前後に IT バブルを起こした背景に、ベンチャーキャピタル投資が大幅に増え、事業所数や従業員数を大幅に増加させたように、ベンチャーキャピタル投資の額の減少が、事業所数の減少を導き、結果として地域ネットワークに対して影響を与える可能性があるため、このショックをどのように乗り切るのか今後も両地域に注目する必要があるだろう。

## 参考文献

Joint Venture: Silicon Valley Network (2008). 2008 *Silicon Valley index*. Retrieved from <http://www.jointventure.org/publicatons/siliconvalleyindex.html>

Saxenian, A. (1994). *Regional advantage: Culture and competition in Silicon Valley and Route 128*. Cambridge, MA: Harvard University Press. 邦訳、アナリー・サクセニアン (1995) 『現代の二都物語』大前研一訳. 講談社.

Saxenian, A. (2002). *Local global networks of immigrant professional in Silicon Valley*. San Francisco: Public Policy Institute of California. Retrieved from <http://earthops.org/immigration/ppic159alltext.pdf>

Saxenian, A. (2007). *The new argonauts: Regional advantage in a global economy*. Cambridge, MA and

### Saxenian (1994)

---

London: Harvard University Press. 邦訳, アナリー・サクセニアン (2008) 『最新・経済地理学』 本山康之・星野岳穂監訳. 日経 BP 社.

U.S. Census Bureau (2008, August). *County business patterns*. Retrieved from <http://www.census.gov/epcd/cbp/index.html>

Zhang, J. (2003) *High-tech start-ups and industry dynamics in Silicon Valley*. San Francisco: Public Policy Institute of California. Retrieved from [https://www.ppic.org/content/pubs/report/R\\_703JZR.pdf](https://www.ppic.org/content/pubs/report/R_703JZR.pdf)





**赤門マネジメント・レビュー編集委員会**

編集長 新宅 純二郎

副編集長 天野 倫文

編集委員 阿部 誠 粕谷 誠 高橋 伸夫 藤本 隆宏

編集担当 西田 麻希

**赤門マネジメント・レビュー 8巻3号** 2009年3月25日発行

編集 東京大学大学院経済学研究科 ABAS/AMR 編集委員会

発行 特定非営利活動法人グローバルビジネスリサーチセンター

理事長 高橋 伸夫

東京都文京区本郷

<http://www.gbrc.jp>